

禪と日本文化の将来

西  
谷  
啓  
治



禅と日本文化の将来というふうな、大変大きな題であります。少しの時間でそういう大きな問題をちょっと話しくいような感じも致します。まあ大まかに、一つ二つ根本的と思われるような点についてだけお話ししたいと思います。

日本文化の将来といえますと、どうしても現在あるいは将来という時点から考えるわけですが、現代の日本文化というものは大体、西洋文化の影響を非常に深く受けている。或る意味では西洋文化が土着化、少くとも半分以上土着化したような形があるわけであります。従って日本文化の将来というふうなことを問題にする場合には、どうしても世界文化というふうなものを同時に考えないと現代から将来へかけての日本文化というものは本当には考えられない。さつき学長先生のお話にもありましたように、われわれの祖国は日本文化がそこから生え出て来ている日本の国土、日本文化が生じて来ている日本という国であります。その国を心に持ちながら、しかも世界に目を開く、世界文化に目を開くということが、文化の問題を考える場合にもやはり根本になる筈であります。つまり、将来の日本文化という問題は、将来の世界文化、現代から段々と展開してゆく世界文化の問題と切り離せないということ。現代になって世界は急速に「一つの世界」になりつつありますが、そういう意味では文化もやはり「一つの世界」の文化というものになる傾向にあると言えます。しかし勿論それは、ただ等し並みの文化ということではない。日本文化なら日本文化が世界を地盤にしたものにまで成長し、一つの世界の文化に組み入れられてくるということでもあります。他方、禅というものに関しても、禅は別に日本人でなければ出来ないということではない。日本人がやらない場合でも、それに代って外国の人がやるという可能性もあるわけで、禅というものがいろ

いろ新しい局面を開いて来るのには、そういうことも非常に大事な点だと思えます。そのことによってわれわれが外国の側からいろいろ新しい刺激を受け、その刺激によってまた日本のなかでも禅が新しい成長をなし、新しい面を開いていくという事にもなり得るかと思えます。

しかし、そういう事でありませぬけれども、その場合でもやはり、過去の伝統的な日本文化というものが基礎になればそういうことも本当には出来ない。日本文化の将来といつても、そこに同時に、過去へ深く繋がっていくということ、過去のなか、伝統のなかへ深く掘り下げていくことがなければ、将来へ向つての本当の成長、根を張つた大きな成長は望めないわけでありませぬ。ですから、将来への新しい展開のうちで過去の文化の良いところが充分に生かされて来なければならぬので、本当の意味での新しい世界文化はそういうことを要求しているわけでありませぬ。それは将来の日本文化が将来の世界文化に大きく寄与するものにならなければならぬという要求であります。もしその世界文化に方向を与えるようなものになることが出来れば一番いいわけでありませぬ。日本を祖国とするわれわれの、そこに目標が現われているといえます。事実、現在の状況として、西洋の人々が仏教一般、特に禅というものに非常に関心をもち、深い期待を寄せているということがあるわけですが、そういうことが何かわれわれに、大きな自信をもって現代から将来への日本文化を方向づけて行く道しるべになると思えます。しかもその日本文化の方向が、同時に世界文化の方向の少くとも一つの大きな根本の力になるべきであり、そこに日本文化の将来も賭けられているとすると、そういう事態をはっきりさせるのに禅が深く関係してくるのであります。

さつきも言いましたように、過去の伝統から遊離してただ将来だけをという態度からは、本当の力というもの

出てこない。文化というものはそう単純には行きません。きわもの的なもの、世間に珍らしがられるものは、一時ひどく流行することはあっても長続きしません。西洋人に対してすらそうであります。本当に永続的な、本当の意味で創造的な力というものは、そういう浅いものであってはいけないうわけで、どうしても深い過去の文化の力、言い換えると、日本という国土に根を下した、土に根ざした文化の力、つまり過去の日本人々を本当に内から生かして来たような、そういう力を持った文化のその力を受継ぐということ、それがどうしても必要だと思えます。そういう意味で、将来を問題にするということはいつでも、過去を問題にするということと結びつかなくてはいいけないわけで、発達、発展、展開ということとは、そういうことでなければならぬと思えます。そしてそこに、世界における日本文化という、そういう日本文化の将来に方向を与えるものとして、禅のもつ意味が考えられなければならないと思っております。

そのことは、禅の伝統のなかへ深く沈潜して行くという一面がいつも不可欠だということです。実際的にも、というのは行道的にも、また学問的にも、深く伝統のなかへ入って、そこに本当に生きているものを掴んでくる。本当に生きているものとは、現在でも生命をもちうるし、将来においても大きな創造の力になりうるもの、ということとであります。そういう変らない価値と力をもったものを過去のなかから、伝統のなかから汲み出して来る。これはやはり現代から将来へかけて、たえず一面に行われなければならない努力、遂行されなければならない一つの任務と聞いていいわけで、将来へ展開していく方向と過去へ沈潜していく方向は切り離せない、ということがあるのではないかと思います。しかし勿論、過去ばかりということだとそれもおかしな事で、過去ばかりということな

ら、実は本当にその過去の生きた生命というものも、却って捉えられない。何か過去の形ばかりを追うということになりかねない。過去を本当にとらえる為めにも、将来へ目を向ける必要がある。目というものを、或は姿勢というものを、いつも前向きに保つということは絶えず必要なわけです。要するに、両方の方向が、本当に生きた形でたえず一つになって動いて行くことだと思います。そこから、伝統というものを受継ぐという場合にも、たえず何か将来に向けて過去を受継ぐという、そういう生きた受継ぎ方というふうなものが出て来なければいけないわけだと思います。

一般的にいうと、大体以上のような事になりますが、そこで今度は、それについて一つ二つ根本的な問題をといることになります。根本的という、やはり人間というものの問題ですね。人間についても勿論いろいろなことが問題になりますが、今の場合は宗教、禅も含めて宗教というものに関係しているですね。つまり、人間という存在の一番の根本、その根元のところ、基礎のところの問題です。人間の存在というものはどこに基礎を据えているのか、どこに現存在の、つまり自分が人間としてここにこうして生きていることの、根元があるのかという問題だと思います。さっきは「ふるさと」という事もお話のなかに出たようでしたが、故郷というものが無いということ、放浪者になり、根なし草のようになるというのは、自分がどこに生存の基礎を据えたらよいか、現存在の基礎が本来どこにあるかという問題がはつきりしないためですね。そのために迷いに迷って、さまよい歩く、彷徨する。それは人間社会のうちいろいろな形で、浅い形でも深い形でも現われています。例えば、さまざまに思想でも、人間存在そのものの据え所、人間の最後の依り処がはつきりしないものが多いと思うですね。とにかく、

現代の世界文化、日本文化のいづれにも、根本のところになんかそういう問題がある。

勿論、依り処とか基礎といつても、果して何か固定した、決まった形の基礎とか依り処というふうなものを有たなきゃならないのか、或はそういうものを考えなきゃならないのか、そもそもそこからして問題です。場合によつては、依り処なんか一切有たないという立場、立場なき立場も考えられます。「無位の真人」とか、「無依の道人」というような言葉もあります。「道人」、道を行く人だが、しかし「無依」である、どこにも依り処が無い。勿論これは、絶対の自由とか自在とかを言い現わしているわけですが、そういう場合でも、故郷が無いということ自身が、やはりある意味で本当の故郷だ、家郷の無い所に家郷を見出すこともいえます。「独脱無依」というように、本当に独り立ち出来て、何ものにも囚われない、何ものにも縛られない、或は何ものからも脱却した、そういう人間、これは如何なる意味でも自分の外に依り処を有たない。むしろ、人が依り処と言っているものは総べて自分の内だという、そういう立場になる。『臨濟録』に言われている「途中にあつて家舎を離れれず」で、絶えず旅行中でありながら一歩も自分の家を離れない。また「家舎を離れて途中にあらず」で、家郷を離れているが、それでいて旅先きをうろついているわけではない。これはやはり、依り処をもたないし、求めもしないということ、そういう独脱、そういう徹底した自由、独立の立場が、自己本来の根元に徹底した立場だというわけです。よく言われることですが、現代という時代は、今迄ずっと人間の存在を支え基礎付けていたものが、総べてぐらついて来て、しかも新しい依り処が何も見つかからない時代だという。そういう時代には、今言ったような徹底した無依、無所住の立場が重要な意味をもって来ます。自分の依り処を他に求めない。その代りに自分自身というものを掘り下

げて行つて、自己の根元のところに自分の、また人間の、また人類全体の、存在の眞の据え所を見出す。古い言葉でいうと安心のところを見出す。それが本当の独立、本当の自由である。普通に、人間の自由とかを、独立自尊という言葉で言い現わしております。自尊という言葉にはちょっとひっかかりを感じますが、独脱無依ということならばそれは自尊でいい。中途半端な自尊ならば、非常に間違つたことになる。自尊ということは中々容易なことではないから、あまり自尊ということと言わない方がいい。本当の自尊というものの立場に立つのには、あまり簡単に自尊ということと言わない方がいいと思います。

いろいろ話す時間があるかどうか分かりませんが、今言つたことはデモクラシーといわれるものの原則に関係し、同時に禅の問題にもつながっている所が根本にあるわけでありますから、或はもう少しお話した方がいいかとも思っています。それもまんざら日本文化の将来ということと無関係ではないわけですから。

現在のデモクラシーで最も問題になる点は、どうも今いった独立自尊ということにあるように思います。独立自尊というものは、それとしては本当の立場だが、問題はむしろそれを受け取る人間の側にある。それを受け取つて、これが独立自尊だと自分で思っているその人間が、本当の意味で独立だとか自尊だとか言えるような人間なのかどうか。これは大きな問題になる点です。もし本当に独立自尊だと言えないような人間なら、その彼がこれこそ独立自尊だと思っているのは本当の独立自尊ではない。単に彼の妄想にすぎないことになります。一体、デモクラシーの原則は人間における人間性の自覚というものに立脚しているといえます。基本的人権ということがよく言われますが、自分の生命とか自由とかいうもの、これは人間としての基本的な権利であつて、神聖なものである。神聖と



いうことは、誰からも侵されてはならないものということであります。そういう神聖な権利として人権ということがいわれている。そしてそこに、自由や生命というものが、人間が人間であるということの一番基本的な本質だという自覚が現われている。それがないと人間は本当の人間ではないという自覚ですね。例えば奴隷というものは、生物学的な意味では人間であるけれども、社会的・文化的な意味では自分自身の生命に対する権利、あるいは自分の自由に対する権利、そういうものを与えられていない人間で、そういうことが人類の歴史のなかで長くずっと続いてきたわけでありませぬ。勿論、総ての人間が基本的に自己自身の生命や自由への権利を持っているというふうな思想は、デモクラシーで初めて考え出された観念ではない。西洋では古くキリスト教と共に初まっています。人間は神の前では、つまり人間としての本質においては、すべて平等だという見方が既にそこに出ています。東洋では仏教と共に現われています。儒教の「天」の思想にも多分含まれていたかも知れません。しかしその観念は、現実の社会(いわゆる世俗)にはなかなか貫徹されなかった。日本でも儒教の旺んな徳川時代にも、階級の差別というのがあって、実際に人間としての権利を与えられていたのは武士階級だけであつた。いわゆる封建社会ということです。それで明治になって初めて、四民平等ということで基本的人権の立場が出て来たのですが、これはやはりデモクラシーの思想が根本に働いていたといつていいと思います。

しかもその場合、大事な点は、万人が人間としての本質において自由だというだけでなく、そこにもっと深い自覚が加わっているということです。つまり、もし自分だけが、或いは特定の間人達(例えば武士階級のような)だけが、現実にそういう自由をもつていて、それ以外なお自由をもつていない人間が残っているならば、その限り自

分達が現実にもつ自由もまだ本質的に現実的な自由になっていない、というそういう自覚です。これを裏からいうと、自分の外に、或は自分達の外に、まだ基本的な自由を實際に与えられていない人々があって、その人々が自由を實際にもつことが出来た時に、そこで初めて自分達も真に本質的に自由になれるのだ、という自覚です。それは仏教的にいえば「自他不二」という立場、キリスト教的にいえば「隣人愛」の立場です。そういう宗教的な立場も歴史のうちに長く働いていたのですが、実際にはなかなか貫徹されなかった。それが現実に貫徹されたのは近世のデモクラシーに初まるので、デモクラシーの原則の底にはそういう宗教的な人間の自覚が流れていたと思います。とにかく、どんな人間でも平等にそういう基本的権利をもっているという自覚、それは人類の歴史のなかでは非常に大きな、革命的で画期的な事柄だったと言っているといわけて、デモクラシーのもつ大きな歴史的意義は否定出来ないと思います。ただし、現在の問題として、果してそれで問題が終っているのかどうかということですね。例えば私には基本的人権という言葉が既に問題になります。自由というような人間存在の根本的なもの、本質的なものが一つの「権利」と見做されている。権利と訳された *Right* とか *Recht* とかという言葉は「正当」、「正義」、「法」などの意味を含んでいる言葉ですから、正義に基いたもの、正当に主張しうるもの、自然な「法」にかんたものという意味ですね。だから自分が他者に向ってそれを主張しても決して間違いにならないということですね。人間は自分の存在や自由というものを自ら主張し、他に向って承認を要求し得る正当な資格がある。そういうことが「権利」ということだと思えます。そこで、自分の自由や生命が自分の権利だという事ですね。それは、自分のもっているような、自然な「法」にかんたもの、いわゆる「天賦」なものを自ら主張することで、正当な権利――

実は権利はもともと正当性を含んだものですが——の主張である。その場合、その主張もまた権利である。権利を主張する正当な権利である。権利という観念のうちには、権利の主張から、主張の権利にまで延びて行けるところが、本質的に含まれています。そこでは「正しさ」、正義や正当が、自然法とか天賦ということから、自己のなす主張に至るまで、一筋に貫かれていく。これは、自分のうちなる天賦のものを自分が外へ向って主張するという自己主張ですが、その自己主張は、天賦とか自然な法とかいう超越的なものによって、つまり人間の作為以上のものによって、裏付けられていますから、自分の正しさについての徹底した信念を含んだ自己主張になります。権利というものが必然的に、権利を主張する権利、つまり権利への権利として現われてくるということは、自分の正当さの主張がその主張自身の正当さへの主張になり、更にそのまた主張の正当さの主張になり、というふうにして、自分の正当さとその主張とがどこまでも循環し続けること、そういう人間の態度が現われてくるということであります。こういう自己主張は本当に人間の真実な態度、人間存在の真理、真実、まことを表わした態度なのでしょうか。社会的な差別が存在している時に、自分の正当な権利をあくまで主張し、その社会悪を破るといふことは、もちろん正しい態度ですが、問題はその正当性が果して人間存在の真理性と同じであるかどうかということです。権利としての正当性は、自分自身の側から自分は正しい、自分はこういう正当な権利をもっている、というふうになす意味を含んでいるわけですが、そういう自己主張の意味を含んでいる正当さが、果して人間の根元、人間の基本的な自覚を表わしていると考えていいのだろうか。一般に正当性と真理性、「正しさ」と「まこと」とは本質的に違うのではないかと思えます。いま真理性と言ったのは、さっき言った仏教の「自他不二」、キリスト教の「隣人

「愛」などに現われている人間の有り方です。それはデモクラシーの底を流れている人間自覚の立場だと言いましたが、デモクラシーの原則に「友愛」、つまり「兄弟愛」が含まれていたところにそれが現われています。しかし、デモクラシーが現実社会の上に実現される時、その「友愛」が実質上脱落し、従って人間自覚の宗教的基盤が忘れられて、宗教的「愛」を抜きにした「正義」の基盤で自由や平等が考えられた。人間の基本に「権利」を見る考え方は、そこから生れたのだと思います。

仏教の立場、或は禅でもいいわけですが、禅の立場のうちには、人間の自覚という問題があるわけですね。自覚というのは、人間が自分自身の存在に関して、これでもう疑いがないという本当の確かさというものに達し、且つその確かさを自分で直知するというようなことです。確かさといっても、他人からこうあるのが確かさだと説明されて、そうかと思うというようなことではなしに、自分自身が身をもって確かめえた確かさということです。そこには、自分が本当に自分自身になったとか、本当の自分というものに達したとか、そういうことが内に含まれているような確かさということですね。近頃でも、存在の確かさとか、或は自分を確かめるとか、そういう言葉をよく聞きますが、その場合の確かさということは、そういう意味のものでなくてはいけません。例えば或る大学の学生が言っていたことですけれども、下宿にじっとして居るとどうも何か不安だ、自分というものが確かになくなって来る、それで街頭デモでもやって警官となぐり合うと、或いは警官になぐられると、それで何となく自分というものを確かめたような感じがすると言う。なぐるとかなぐられるとか、これはまあ似たようなものでしょうけれども、そんなふうなことをして一時的に自分を確かめた気持ちになっても、それは本当の確かさではない。何か

相手があつて、その相手とどうかしている間だけ自分が確かに思えるが、自分一人になると何となく不安になり、落着かなくなるといふのは、やはり根本的に根なし草の状況、根がないという状況でしょう。自分を確かめるといふのも、自分が本当の自分になったといふことではない。自分の存在そのものの確かさとか、自分の存在そのものを確かめるとかといふことではない。禅の言葉で言うと、「自己本来の面目」を見るといふようなことではない。本来のといふのは、つまりもともとそうであるようなという意味ですね。今始まつたことではない、また将来新しく始まるいふことでもない。自分が見付けるのは今はじめて、或は将来新たにだけれども、見つけた時には、それはもともとそういうものなんだ、そういうものだったんだとわかるということ。生まれた時からそうだったんだ。或いは、「父母未生以前」の本来の面目と言いますから、自分の生まれない前、父母さえもまだ生まれない前から、といふことは世界乃至は宇宙が生ずる以前、或はこの地球がこういう形をとつて現われて来る以前からといふことにもなります。本来のとは、そういうことで、そういう本来の面目にチラッとでも出会うこと、言いかえると、自己の根元への路線の上で、或いは根元からの路線といつても同じですが、ともかくそういう路線の上で自己自身に触れること、それが本当の確かさといふことになる。本当に自己を確かめるといふことになる。そしてそういう本来的自己は、自己が本当にそれに成るといふことによつてしか出会えない。本来の面目を徹見するといふことは、自分が自分自身に徹底することであり、自己自身に徹底するといふことは、ただ自分自身によつてのみ確かめられる自分自身の確かさを底まで、*gründlich* に、突きつめる、自己の根元にまでとことん突きつめる、まあそういう事だと思ひます。

これは、いやおうなしにそうするよりは道がないということなんです。自己自身を本当に確めるといふこと、それはむつかしいといえれば非常にむつかしい様なことですけれども、他方では、昔からよく言われたように、我々の日常にいくらでも現われているということですね。例えば飯を食べるということにしても、自分が腹がすいてゐるのに他の人が代って飯を食うということでは間にあわない。自分が眠くなつた場合に、他の人に代りに眠むってもらふわけにはいかない。その他何事でも、我々の日常生活にはそういうことが端的に含まれている。要するに自分は自分なんで、外の人には代ってもらえない存在なんです。その限りどこにでも、今言つたようなことは現われている。もともと自分はここにこうしている自分だということ、自分は自分だということ、そういう自覚は自分の存在の根本で、自分のなすことに現われている。一念一念がその自覚だともいえます。しかもその自覚は、自分という存在の根元にまで、いわば透明に通つてゐるわけで、その路線は世界万物の根底まで貫き通る軸になつてゐるものです。つまり、時間と空間を超えたところまで透つてゐる。空間を超えるといへば、世界をも包むような、大虚空といわれるような開けということですが、そういう無限の開けが現在の一つ一つの瞬間に開けてゐることが、自己の根元といったところといえます。いま一念一念にといったのは、一つの念い、念ずるといふ時の念であります。同時に時間的にいうと一つの瞬間という意味にもなります。これは同じことで、一念といへば存在自覚の面、瞬間といへば自覚的存在の面を表わすと言つてもいいかも知れません。自己といふのは自覚的存在とも存在自覚ともいえるので、それは同じことです。そういう一念が、つまり今の瞬間が、時間の唯中で時間を超えたもの、時間を超えながら時間の唯中というようなものといふことです。そこでは例えば一念万年、万年一念

などともいわれます。一念万年と言えば今の瞬間が時間を越えたものであること、一万一念と言えば、時間を越えたものが今の一念であること、というふうにもいえるわけです。我々の日常生活の一番浅いとされる所が、我々の存在の根元のところにまでつながっていると、まあそういう事ですね。

そこで、さっき言いましたデモクラシーという問題に帰えると、この根元のところを自分の権利ということで押さえるということに、非常に問題があるんじゃないかと思うのです。眠るのも飯を食うのもみんな自分の権利だといえ、それはそう言えないこともないわけですが、本当は権利などということではなしに、権利以前のもの、自然にそうなっているものです。或は、逆に言いますと、権利というようなことは、「父母未生以前」のところ、世界が生じない以前のところ、この時間・空間の世界——仏教的にいえば「生死」の世界——を取り払った、その意味では「世界」も何もなくなくなったところ、そういうところで自己というものの根元とか現存在の基礎とかが問題になるという場合には、場違いな概念になります。それを権利というようなことで押さえるというのは随分おかしい事になる。権利ということが大事な問題になるという場所は、もちろん別にあるわけです。現代もっぱら問題にされるように、具体的には政治や経済などの領域では、権利ということは非常に大事だということはあるわけです。しかし、人間の一番基本のところを権利という言葉で押さえて済ませるということは問題だと思えます。

そうすると、デモクラシーというものの一番の基礎は一体どこにあるのか、それはやはり改めて問題にしなればいけない事柄ではないかと思うんですね。デモクラシーというものは、基本的人権ということだけを基礎にして一体本来に考えられるのかどうか。その問題を掘り下げて考えることは、これからの課題じゃないかと思えます。

今迄はまあそれですんで来た。しかし、デモクラシーというものと結びついて、現在いろいろな問題が起こる、今まででも起こっている。場合によっては全体主義的な体制になったり、その全体主義がまた自分の方をデモクラシーと称したり、或いは逆に個人主義的な自由の立場、いわゆる自由主義がデモクラシーというふうになったり、思想の上でも実際政治の上でも非常にはっきりしない、曖昧なところがまつわりついている状況です。いわゆる共産世界が「自由の国」を理念に掲げれば、自由世界は死をもって「自由」を護るといふ。つまり、自由というものの基礎がはっきりしていない。人間という存在の上で、本当の自由というものはどこに成り立っているのか、本来どこをふまえて自由ということがいわれるのか、ということですね。そういう一番の基礎の上で、更に例えば政治なら政治の次元での自由というものが本当にいわれるのは、どういう形でいわれるのか。それが新しい究明の課題になると思います。ただ権利ということでおさえるのでなしに、その権利自身をももう少し根本の所から反省してみると、根源的な意味での自由が、かくかくの特殊な場合に権利という形で特殊化されるんだ、というふうなんです。しかし真の自由は権利なんていうものじゃない、もっと違った、もっと根本的なもので、権利なんてことが問題にならないような所に基いている、自由という人間の一番大事なことは、そういう所に存在しているんだ、成り立っているんだと、まあそういうことですね。

そこで、もし禅の立場が人間の自覚ということの徹底であり、徹底した自覚だということであれば、禅の立場から当然今のような問題、デモクラシーというものの基本についての問題、それは現代から将来へかけての基本的な問題だと今言いましたが、そういう問題もやはり考えられなければならない。恐らく禅なんかが一番、自由の本来



の姿はこうなんだと、平等の本来の姿はこうなんだということをはっきり考えて、日本人にも広く世界の人間にも知らせる、告げ知らせるといふ事の出来る立場の筈ですね。思想的にも實際生活の上でも。案外西洋の人々が禪に関心を寄せているのは、そういうようなことに対する予感といえますか、はっきりした認識ではなくても何となくそういうものを感じ取っているのかも知れません。これはありうることです。ビート禪とか何とか、アメリカでも悪く言われるいろいろな現象でも、これはまあ悪くいわれて当然のところはあるんでしょう。よく知りませんが。しかし、それでもやはりその底には何か、現代の社会といふものにぶつかって、そのなかで本当の自由といふようなものは一体どこにあるのか、というふうなことを根本的に問題にしているようでもあります。本当の解決を得ているかどうかは疑問ですが、彼等のもつ問題の次元というものが、かなり根本的なところに触れているんじゃないかという感じも同時にしますですね。まあそんなふうな場合を見ても、そういう若い連中が求めて行く時のねらいの正しさとか、どこに本当の問題があるかとか、そういうことに対して禪の側から指針を与えることが出来るように将来ならなくてはならないんじゃないか。一つはそういうことも考えられます。

自由や生命というような、人間の基本的なものに関して、なぜ権利と考えられるようになったか、その背景にどういうことがあるか。次にその点に少し触れたいと思います。非常に大雑把に申しますと、今迄の西洋文化というもの基礎になっている人間の見方、見方だけでなしに、その見方に従っての在り方も含めて、人間の見方とか在り方ですね、それからまた世界の見方とか在り方、つまり西洋の世界観や人間観、それと東洋の世界観や人間観との間には何か根本的な違いがあるようです。そして私は、今後は両方がそれぞれの長所というものをお互いに生か

し合つてゆく、という方向になるんじゃないかという感じを持っております。根本的な違いというのは、思い切り単純化して申しますと、西洋の場合では、人間が広い意味で「意志」というものを中心にして捉えられている。また人間の在り方が根本的に意志的になっていていると思ひます。いわゆる主意主義的な人間観です。それに対して東洋では、人間の捉え方も在り方も非常に違つた性格をもつてゐる。これもごく単純化して申しますと、「自然」という言葉で考えていいんじゃないかと思ひます。意志と自然、意志的ということと自然なということ、この対立によつて、人間観における立場の根本の違いを言い現わせるのではないかと思ひます。

意志という一般的なには、自分の或る目的をそこに実現できるように自分の環境を動かすという働きですね。その環境は先づ第一は自然界とその事物です。しかし、外の自然界ばかりでなしに、同時に自分自身のなかの自然もある。人間は自然界のなかから生まれて来た存在ですから、人間の体は勿論ですが、心のいろいろな能力、例えばさまざまな感覚や感情、思惟や欲望など、そういういろいろな能力が自然に具わつてゐる。意志という能力もそのなかの一つですね。そこで主意主義的な人間観というのは、意志というものに力点を置いて、その外のいろいろな生具の諸能力が意志中心的に統一されるという形で人間を考える。また実際上にも、人間は自分というものを非常に意志的に造つていく。自分がこう在りたいと思ひ、或はこう在るべきだと思ふような形に自分自身を形成していく。自分の存在にそういう形を与えていく。自分の在るべき形をはつきり目的に仕立てて、自己形成をする。つまり人間の自己自身に対する係わり方が、非常に目的意識的である。これは、外の自然に対して人間が自分に都合のよいように、自分がよいと思ふように形を与え、そのために自然を支配し征服するように、同じ行き方を自分自身

に對してもとる、ということではないかと思ひます。そういうふうには、意志を中心にして自分というものを統一しながら、その統一された自分の力でもって外の自然界を支配し征服していくという人間の在り方ですが、その在り方が「自我」、西洋の言葉でエゴ ego といわれるものではないかと思ひます。西洋人が自己といっているものはそういうエゴということで、それは本質的に意志的だと思ひます。どこ迄も前へ向いて、いつも自分を中心にして、自然の世界に自分の目的を実現していく、そういう方向における自己だと思ひます。東洋の場合は、どうもそこが非常に違ふので、自己はむしろその逆の方向を本質にしているのではないか。もちろん意志というものは東洋人にだつてないわけではないですけれども、しかし意志をどこまでも強く伸ばしていく、つまり自我のしていくというのではない。人間がどこまでも自己を主張していくのではない。

さっき言った基本的人権という考えの根本には、そういう意志中心的な在り方があります。自分の存在が正しいとみればどこまでも自己を主張していく。そうするのが同じくまた正しいのだという考え方ですね。これは非常に強い在り方で、特に倫理の領域では大事なものだと思ひます。正しいことはどこまでも貫く、間違つたものはどこまでもやつつける。つまり是非善惡の別をあくまではっきりさせるといふ事ですね。これは倫理の立場の基本をなすわけでありませう。

西洋人の宗教、すなわちキリスト教は、根本に非常に倫理的な性格を持っていて、それがよい面にもなっているといふことは確かだと思ひます。もう詳しくお話しする時間もなくなりましたが、キリスト教の神は全知全能の神といわれ、根本的に意志的な性格の神です。その神は I am that I am (我れは、我れありといふ我れである)と

名乗り出た神である。旧約聖書にそういうことがあります。つまり、私はここにわれありと名乗り出た此の私だぞというようなことでしょう。自分は自分だとして自らを頭わにした神、むしろそういう形でしか自分を啓示しない神ということで、これは絶対的な意志としての神、その絶対的存在の本質が絶対的意志であるような神ということであり、それです。だからその神は全能である。絶対的な力、絶対の権能を持ち、絶対の権威を帯びた神ということですから、神に対しては、人間もやはり意志によって答えなければならぬ。神と人間との関係は意志と意志との関係になります。人間の自己はエゴ、自我ということですから、その限り神の意志と衝突する意志です。意志と意志ですから、衝突すれば正面衝突してしまふ。その正面衝突する点を神に対する罪、つまり人間の「原罪」ということで言い現わしているわけです。つまり人間の自我、人間のエゴ的な在り方の根本には罪があるということですね。神に対する罪という此の宗教的な罪の意識を通して、キリスト教では人間の自覚というものが鋭く深められているところがあると思います。倫理的な正しさを求めるということと結びついて、宗教的な罪の自覚が深められたわけです。それからもう一つ、神と人間との間の愛がキリスト教の基本ですね。罪ある人間と神との衝突が、仲介者としてのキリストによって和解され、キリストが人間の救い主になったということで、キリストを差し向けたのは、罪に陥った人類を救済しようという神の意志である。そして、その神の意志に素直に随順するのが信仰である。信仰は、人間の意志が神の愛によって再び正しくされるということだといえます。どこまでもやはり、意志と意志の関係が基礎になっていて、ずっとそれで貫かれています。

ところで、西洋では近世に入ってから、世俗の生活がだんだん発達して来た。それは政治や経済、法律や倫理、

或は学問などが、自律的になったということです。つまりキリスト教の宗教的地盤の支持を必要とせず、自立して来たというわけで、いわゆる「世俗化」の滲透です。例えば、人間観の基本的な事項である自由や平等ということでも、宗教的には神の面前で裁きを受ける罪人としては万人が平等であり、またキリストによって救われる信仰者としても万人平等である。また同じく信仰によって、神の愛のうちで、各人は真に自由であるとされたわけですが、世俗生活が自律的になると、万人の自由や平等は、特にキリストを考えなくても、「自然の法」によって、人間本来の有り方として、万人に具わっているものだという考え方に移って来ます。この移り行きが大きな変化だったので、「キリスト」を考えて初めて自覚に上った自由や平等が、やがてキリスト抜きで考えられるようになったということです。つまり宗教的な罪の意識も、それと同時に宗教的な愛、神の愛や人間の隣人愛も世俗の生活の基盤でなくなつて来たわけです。前にいったデモクラシーが、初めは友愛の原則を含みながら、しかもそれが無力であり忘却に陥つたということ、そして自由や平等を基本的権利として規定する考え方だけが強まって来たことは、そのためであります。現代では、そのデモクラシーがいろいろな複雑な問題を孕んで来たわけですが、それと平行してキリスト教も現代ではむつかしい状況を現わしつつあるようです。一言でいうと、今まで信仰の対象であった全知全能の神とか、人類の救い主であるキリストとかいうものが、現代の欧米の人々には簡単に信じられなくなったというところがあるわけです。これは欧米の人々には根本的な問題です。ニイチエのいわゆる「神は死んだ」ということ、そしてその跡に現われて来たニヒリズムという問題です。そこで、そういう状況に直面して、全能の神とかキリストとかいう特別な存在者を依り処にしなくなつても、同じように根本的な安心を与えてくれるような他の

道が何かないだろうか、という問いが当然起ります。人間存在のぎりぎり決着の場というものは、ニヒリズム以外にないのか。人間の故郷としての神が無くなったとしても、その後には彷徨以外に何も残らないのか。今までの宗教のように、人間存在のぎりぎりのところで確かさを与えてくれる立場がないのか。現代の根本の問題はまあそういうことだと思えます。禅などに関心を持たれている理由も、もちろんそこにあるわけですね。

それで東洋に目が向けられて、なぜ全能の神というような、絶対的権能をもった意志、そういう特別な存在者というものを考えない仏教のような立場が、宗教として成り立って来たか、それが問題になるわけです。これは簡単にいうと、人間の見方が逆の方向に中心を置いておられるからだと思います。逆の方向というのは、意志を中心にして自然を支配していく、外の自然や内の自然を支配していくということではなくて、むしろその意志の根元へ、意志自身の根元のところへ帰ってくるという方向です。意志の根元というのは、意志が自然から与えられているところという事です。人間に意志があるのは、人間自身の意志によるのではない。人間が自分で、自分の意志でこしらえ出したものではない。意志の力は人間を根本から動かすとしても、そういう意志がそもそも具わっているという根元のところでは、意志は自然から与えられている力だという外はないわけですね。そこで、意志というものを、ただ前向きに先きへ先きへと進むに委せるのではなしに、逆の方向へ、意志自身の根元へ帰らせていくという立場も成り立ちます。つまり、自分は自分はいって自分を主張している人間の意志的な自我を方向転換させて、それ自身の根元へ反省させ、その根元のところから自然というものに触れさせる。意志を通して意志自身の根元へということですから。先きへ伸びて行くだけでなしに、先きへにして行くだけでなしに、意志が意志自身の根元へ、つまり自然へ、

たえず解消されて行く。これも意志の働きではありませんが、自分を消して行く方向です。先きへのして行くのは意志の本性ですが、同時に意志が自然へ帰り、自らを消して行くという方向をも、意志にもたせる。意志を、自然から自然へという形の意志にする。簡単にいえばそういう立場です。

もう時間がなくなりましたから、一足飛びの話になりますが、意志の根元のところで意志が自然のうちに解消するというのは、エゴがそこで消える、自己主張する自己が消えるということです。同時に、エゴに対立する他者も消える。他者は対立するだけの他者ではなくなるわけです。自己も他者もただの意志だけの立場だと、自己は自己、他者は他者と単に別々で、ばらばらな存在です。両方が結びついて、存在の根元での結びつきではなくて、利害関係や権力関係などでの結びつきに終ります。そういうことではなしに、存在の根元、意志の根もとに帰ると、前向きに進む意志的な方面では自分は自分であり、他者は他者であるという、それぞれ独立したところはあるわけですが、同時にその根元のところで、大きな自然のなかに通じあっているところがある。通じあうものがあるというそのことが、自然という言葉で言い現わされているわけです。そこで、仏教ではよく「自他不二」ということが言われますけれども、自他不二ということは、そこではじめて自己が本当の自己になる立場だと思えます。本当のというのは自然のことです。昔の言葉によると「自然」というのですが、それを「おのずから然り」と読んで、「おのずから」、即ち自然に、つまり人間の意志を超えたところから、「しかあり」、現にあるようなものものになっている、ということをお願いしています。しかし、その「おのずから」が同時に「みずから」でもあるところがあるわけですね。「みずから」とすれば、自分は自分以外の何ものでもない。飯を喰ったり眠った

りするのは他人に代って貰えないという、当体そのものとしての自己だということです。しかも、この「みずから」が「おのずから」であり、「おのずから」が「みずから」である。各自が各自自身でありながら、自分自身であるということにおいて自他不二である。そして自他不二ということにおいて各自は各自自身である。そこが自然というところじゃないかと思えます。しかも、この「自然」においては、人間ばかりの関係ではなくて、あらゆる他の事物、ありとあらゆるものに対する関係において、自他不二ということが自分が自分であるということ、本当の意味で自分が自分だということになる。つまり、自分というものも大きな自然ということの中で成立していて、その中で互いに、隠れた深い繋がりをもっている、というわけです。自他不二というのが本当の自己だというのは、言いかえると、仏教的でいう無我が本当の自己の在り方だということではないかと思えます。

そういうところから考えると、さっきいった自由とか平等とかいうことも、考え方が非常に違って来ますね。自由といっても意志の自由ということだけじゃない。「意志の自由」は意志の自由からだけでは本当には考えられない。もっと根本的に、自然から—つまり、「みずから」ということが「おのずから」ということ—一つであり、「おのずから」が「みずから」であり、「みずから」が「おのずから」であるというところから—本当に考えられる。東洋的な意味の自由とか、自在とかはそういう立場から見られたものだと思います。だから、自由ということも、西洋でいう意志の自由とか、或はさっきいったような、民主主義の基礎は自由であってそれは基本的人権であるというふうなことが、とにかくそういうような次元からもう一つ奥のところまで究明して考えるということですね。



その他あらゆる基本的なこと、例えば知識とか知とかということについても、そういうことが言えます。そういう問題を考えるのには、現在でしたら、科学、社会科学とか自然科学とかいわれる科学としての知とはどういものか、科学と結びついた行為とはどういものか、社会的実践といわれますが、それはどういものか、その他一つ一つの言葉を一層掘り下げて考えなければならぬわけです。知といっても、もっと違った意味での知というものが同時にあるということですね。科学的な立場での知というものがどこに限界をもつかという難しい問題を掘り下げて考えるためには、やはり人間のうちに含まれている「知」というものの立場を、人間の自覚存在、又は存在自覚の問題として掘り下げてみる、という路線が必要になってくると思います。ところで禅なんかの場合には、そういう路線がはっきりした自覚をもって、つまり人間の自覚存在そのものうちに組み入れられて現われています。従って、知の問題が己事究明ということと根本的に結びついて現われているわけですから、禅の立場は、今いった難しい問題を掘り下げてゆくには、恐らく唯一つのもう一つつけの立場かも知れません。その他、現代のいろいろな問題について、似たような有利な点が禅には沢山あると思います。そういう有利な点をはっきりさせるのには、はじめに申しましたように、伝統的な禅のなかへ出来るだけ深く入って、其処で人間のどういう在り方が成り立って来ているのか。どういう自覚の立場が開かれているのかということ等を学ぶことが必要です。他方、同時に、それを現在の問題、現在から将来へかけての問題にぶつけて、その間から、現在の人間としての我々の上に伝統的なものがどういふふうを生かされるのか、ということを究明していく。それが、禅というものは己事究明だということの意味だろうと思います。自分ということの究明は、結局は、伝統のなかに自分を投げ込むことが現代の問題に自

分をぶつけることだ、ということに帰着します。伝統が現代から将来へかけての人間の問題の解決に、どういふ新しい力を新しい形で示しうるかということ、現代に生きる者として身をもって修証することです。身をもってということは、自分が現在において過去と将来との切れ合いの、出来る限り掘り下げられた深処に成るといふ形だと思えます。伝統を生きることが直ちに、真に新しい文化の形成、本当の意味での歴史の形成にいくらかでも参与することになる。そういう形で己事を、自分のことを究明する、つまり伝統の禅を現代の自分のこととして究明していくということ、これはただ伝統だけということでもないし、伝統から遊離したこともない。はじめに言いましたように、どこまでも過去へ向くことにおいて未来へ向く、未来へ向くことにおいて過去へ向く、という循環の動きでしょう。「南面して北斗を見る」とか、「倒さまに仏殿に騎って山門を出ず」とか、いろいろな言葉がありますが、それを藉りて、禅と日本文化の将来という問題の在り場所を言い現わすことが出来るかも知れません。しかし、禅についてもあまりはきはきしたことが言えず、日本文化ということについてもあまり言えなかったので――、雑な話になりました。

(昭和四十三年五月二十五日講)